

昭和63年度

# 統合保育のあり方

～統合園における障害児の事例を通して～

川崎市総合教育センター幼児教育長期研修員

## 統合保育のあり方

### 一 統合園における障害児の事例を通して一

長谷川真知子<sup>1</sup> 片山世紀雄<sup>2</sup>

キーワード：幼児教育，幼稚園，統合保育，障害児，5歳児

### はじめに

近年、障害児を受け入れる幼稚園や保育園がふえつつあり、障害児保育への関心が高まってきている。川崎市立幼稚園においても20園中3園が統合園として、統合保育を行っている。

この統合保育には、どのような意義があり、実際に統合保育を行っていく上で、どのような問題があるのだろうか。森上史朗は、『障害児は健常児の集団の中に、入れさえすれば、そこでの集団による育ち合いによって望ましい子どもの発達が促されるという安易な考え方』<sup>1)</sup>について問題点を指摘している。では、障害児と一般の幼児のかかわり、それに対する保育者の望ましいかかわり方は、どのようにあったらいいのだろうか。統合園での障害児を観察することを通して、統合保育のあり方について考察してみたい。

## I 研究の内容と方法

### 1. 統合保育の考え方

#### (1) 統合保育とは

『最近までの障害児教育では、障害児に特別な場を提供し、そこで個々の子どもに応じた教育をするといった分離教育が主流であった。ところが1960年代に入って、デンマークやスウェーデンを中心に、長い社会的差別を強いられてきた障害児(者)の生活を一般の人々の生活と同質のものにしようとする考え方や試み(ノーマリゼーションnormalization)が広まり、これが教育の場にも反映されるようになった。わが国もその影響を受け、1970年代以降、統合保育の必要性や重要性が叫ばれるようになってきている』<sup>2)</sup>統合保育は、以上のような歴史的背景の中で生まれてきた考え方であり、『ノーマリゼーションの教育の分野における具体化が統合教育であり、保育の分野におけるそれが統合保育である』<sup>3)</sup>とすることができる。

統合保育の目的は何か。田辺敦子は『統合保育は、医療・福祉・教育の諸分野と連携しながら、障害児と一般児と共に保育し、そのことによって子どもの全面発達をはかろうとするものである。』<sup>4)</sup>と定義したうえで、『統合保育の目的は、すべての子どもが障害の有無にかかわらず、さまざまな個性と能力をもつ人間として、相互に尊重し、協力しあい、可能な限り、同じ時代に生きる仲間と

<sup>1</sup>川崎市立御幸小学校付属幼稚園(長期研修員)

<sup>2</sup>川崎市総合教育センター(指導主事)

して一緒に生活する力を育てることにある。』<sup>4)</sup>と述べている。つまり、障害児だけのためではなくすべての子どもがお互いに尊重しあい、協力しあいながら一緒に生活することをめざしているといえる。つまり、幼児ひとりひとりを大切にしていける保育そのもののねらいと一致してくる。

## (2) 障害とは

WHO（世界保健機構）は障害の定義として以下の3つを提案している。

- ・機能不全（impairment）
  - ・能力低下（disability）
  - ・社会的不利（handicap）
- 一般にいわれる障害の種類には、次のようなものがある。

視覚障害、聴覚障害、言語障害、肢体不自由、精神発達遅滞、情緒障害、病弱・虚弱一般に、「障害児とは、心身の発達が停滞しているなど、一定の持続的おくれをもつ児童」を指している。田辺敦子は、『医学的障害はあくまで医学的障害であって、保育上問題とならない場合がある』<sup>5)</sup>と述べたうえで、『保育上の障害児は、心身の発達の遅れが保育活動の上で著しい不適応状態をひき起こしている子ども』<sup>5)</sup>つまり、『保育に際して特別な人的・物的配慮を必要とし、また保育方法の面でも固有の配慮を必要とすることの多い子どもたち』<sup>5)</sup>と述べている。

## (3) 統合保育の内容と方法

村田保太郎は『統合保育の内容・方法は質の高いよい保育の内容・方法の展開と一致するものであり、何か特別の内容や方法が存在するものではない』<sup>6)</sup>と述べた上で、『統合保育の内容・方法を考えた時、一般の幼稚園・保育所は障害児のための治療施設でもなければ訓練施設でもないということを前提とする必要がある』<sup>6)</sup>と述べている。そして『障害の程度や発達の状態によっては、保育よりも治療や療育を優先して必要とする場合があり、統合保育にはそういう点で限界があるのだといえる。』<sup>6)</sup>と述べている。つまり、統合保育の対象となる障害児は、「望ましい保育」の過程の中で育てていくことのできる障害の程度と発達の状態をもっている子ども、ということができる。

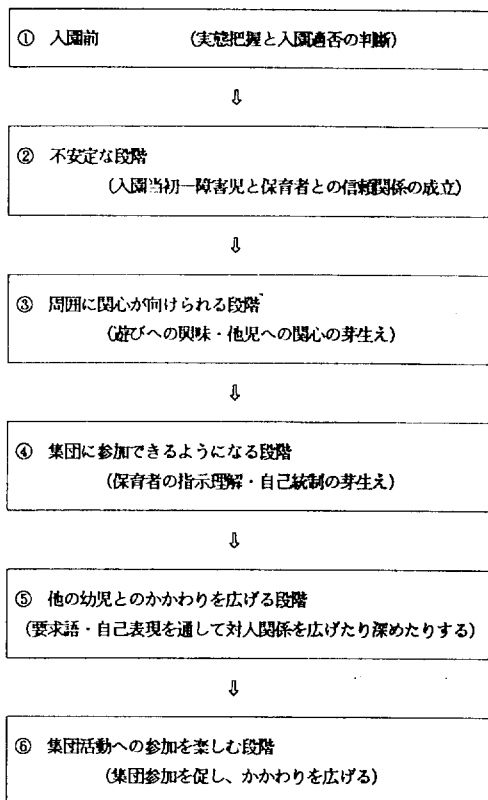
幼稚園における障害児の人間関係の発達について、村田保太郎の文章<sup>7)</sup>を参考に段階的に見ると〔表1〕のようになる。

## 2. 統合保育の実際

川崎市における3園の統合園に通園しているA男、B男、C男を行動観察することを通して、園での障害児と一般の幼児のかかわり、そして教師のかかわり方について考察した。〔※行動観察の方法

- ・時間……登園から降園まで
- ・回数……対象児別に5～6回（S. 63.6～S. 63.11）
- ・記録……筆記及びVTR

〔表1〕 幼稚園における障害児の人間関係の発達について



ここではA男の事例について述べる。

〔事例〕パターン化された遊びを通して、教師との信頼関係を深めながら、周囲の子どもたちとかわっていくA男

(1) A男について

- ・障害の状態……精神発達遅滞、自閉的傾向
- ・年齢……5歳
- ・家族構成……父、母、兄
- ・相談歴……1歳—ことばの遅れで保健所に相談
- 2歳—児童相談所に相談し心理治療に通う
- 3歳—幼児通園施設へ通う
- 5歳—幼稚園入園、Sセンターへ行動療法に通う

(2) 行動観察を開始した6月頃の様子

晴れている日は毎日、外で教師に押ししてもらいながらぶらんこにのり、その後、校庭の岩石園にある池の周りを歩いていた。室内では、青いマジックや青いプラスチックのねじなどを持っていないと、不安定になりやすい傾向がみられた。音声言語はほとんどなく、教師の「おわり」ということばは理解できるようである。

(3) A男の行動観察 11月11日

他児とのかわり	A男	教師とのかわり
(一斉活動時) ・保育室で宇宙のロケット作り	・教師の外靴を持ってくる ・教師と手をつないで園庭へ行く ◎ぶらんこにのり いろいろな声をだす にっこり笑う ・ぶらんこの周りにあるタイヤの中にへこんだタイヤを見つけなおす ・ぶらんこにのり	→ 手をつなぎ園庭へ向かう ・ぶらんこの後ろから押し、声をかける 「A君、お日様まぶしいね」 「朝、何たべたのかなあ」 ・「A君つかまえた！」と後ろからつかまえる ・タイヤがもとにもどったのを見て、「わあなおった！」と手をたたく
(自由な活動時) ・大勢外へ出てきて遊ぶ	◎小学校の池の周り(岩石園)を 歩く ・声をだしながら石の上を歩く ・教師にタッチする ・靴と靴下をぬぐ ・裸足で石の上を歩く	・「落ちないで」 ・両手をさしのべ一周してきたA男とタッチする 「いってらっしゃい！ポッポーポッポー！」 「気をつけてね、いってらっしゃい！」 ・「おへやにもどってみようよ。友だちいるよ。Y君がまってるよ」
・O男がぶらんこにのり、立ちこぎをする ・O男が隣り、A男ののったぶらんこを自分から押す	↓ ・ぶらんこに向かうが他児がのっていることができない ・教師におさえられ、ぶらんこの横で待つ ◎ぶらんこにのり ・O男に押ししてもらいにこにこする	・A男を後ろから押さえ、一緒に待つ ・O男が押すのを見て「わあ、いいなあ」 ・「ありがとう」とO男とかわっておす
・O男、S男も教師を追いかけっていく	↓ ・池の方へ走って行く	・A男を追いかけっていく
・教師に言われ、O男とS男は「パンツもってくる！」と走って園舎に向かう ・数人集まってくる ・O男とS男はパンツとズボンを渡し、上着を取りにまた走って行く ・A男が洋服を着る様子を見る ・O男は「はいっちゃんめい」とA男を後ろからおさえる ・O男はA男の後ろから歩きながらついて行く	◎池に落ちる ・びしょぬれになる ・教師のそばへ寄ってくる ・おしっこをする ・洋服を脱ぐ ・持ってきてもらった洋服を教師に援助してもらいながら着る ◎池の周りを歩く ・O男に押しえられるが、また歩き始める	・「パンツとズボンを持ってきて」と、O男とS男に頼む ・「ありがとう、まにあった、まにあった」 「S君ありがとう、よかった、よかった」とA男にはかせる ・「上がりないんだ、上がり」と上着がないことを話す ・寒いと思いA男を後ろから抱きかかえ、上着を持ってきてくれるのを待つ ・「ありがとう」と上着を受け取り、A男が着るのを援助する

→ 言語をともなったかかわり

→ 言語をともなわないかかわり

#### (4) A男の行動についての考察

A男は、靴箱から教師の外靴を持ってきて、教師の手を引くことで、教師にぶらんこへ行こうと要求し、誘いかける。そしてぶらんこにのり安心できる相手である教師に後ろから押しってもらうことで快い気持ちになり、「A君、つかまえた!」という教師のことばかけと抱きかかえる身体接触到、おもわず声をだして喜びを表現する。

そして、小学校の池の周りに並んでいる石の上を歩く。さらに裸足になり、石の感触を足の裏で味わう。時々池の水に足を入れる。

A男はぶらんこにのり、池の周りを歩くことで、心の安定をはかっていると思われる。毎日、その行動に固執することで、行動がパターン化され、一学期からずっと同じ遊びが繰り返されていると思われる。パターン化された遊びをくずしていくのはとてもむずかしい。これについて、名倉啓太郎は、『こわそうとしていきなりやめさせるのではなく、人との関係へつないでいく。あるいは変えていく。そうすると、これがだんだん人への固着、人への固執になっていきます。』<sup>8)</sup>と述べている。教師がそばにいて行動を共にし、A男の興味や遊びを受容し、共感していくなかで、A男にとって教師が「大切な人」「便利な人」となり、教師との信頼関係が深まっていったと考えられる。

「物対象」（ぶらんこ、池の周りを歩く）とのかかわりの中に教師という「人」を介在させることになる。教師との間に「人」関係を通した遊びが始まると、やがて他児との間にも「人」関係を通した遊びへと広がっていく可能性がある。

ぶらんこという固定遊具を媒介に他児がぶらんこの周りに集まってくる。そこで少しずつではあるが、のっている友だちを待ったり、友だちに押ししてもらったりしながら、他児とのかかわりができてきている。〔表1〕の段階と照らしあわせてみるとA男は「不安定な段階」から「周囲に関心が向けられる段階」に移りつつあるように思われる。

また、興味深いのは、O男の言動である。O男は日頃わがママが多く、孤立しがちな子ということである。自分からA男がのるぶらんこを押したり、教師に言われて猛スピードで上着やパンツをとりて走って行く。そして着替え終えたらすぐにまた池の周りを歩こうとするA男に、また池に落ちるのを心配して「だめ!」と抱きかかえる。そのうちA男のあとを、O男もついて歩く。このO男の思いやる言動は、まさにA男を受容し、共感していく日頃の教師の姿勢からうまれてきたものと思われる。

また、クラスの子どもたちにA男の存在は、どのようにうつつているのだろうか。みんなと同じように話すことのないA男を見て不思議そうに「人間だったらしゃべるのに…」ということばを耳にした。また、いろいろな声を出しているのを聞いて、「英語しゃべっているのかなあ。」という子もいた。自分と違った面を持つ友だちの存在を肌で感じとっていると思う。

このような、自然なふれあいの中で、クラスの子どもたちが障害児に対する理解を深めることにより、A男を中心にした園児達の生活は次第に充実してくると考えられる。

## II 研究のまとめと今後の課題

さまざまな個性と能力をもった存在である幼児ひとりひとりを大切にす保育があつてこそ、統合保育が成立する。そして、望ましい保育のあり方を求めていくことが、望ましい統合保育のあり

方を求めていくことと一致することが確認できた。そして、一般の幼児は、障害児への教師の姿勢から自分たちがどのようにして障害児とかかわっていくのがよいかを学び、共に生きていく（生活していく）人間と人間とのかかわりのあり方としてとらえていくのである。

## 1. 教師のかかわりについて

### (1) 障害児へ

- ・入園時、一般の幼児とのかかわりの中で、園として障害児と共に何ができるのかを明確にする。（目標の明確化）
- ・入園当初は、不安定になるので教師との間に一对一の信頼関係が成立するような身体接触を含めた濃密なかかわりを大切にし、障害児が安定する場所や遊びをみつける。また、集団適応を急がないかかわりをもつ。（信頼関係の成立）
- ・子どものものの見方、感じ方に共感し「この人は自分のことがわかってくれる人だ」と思われることで、子どもとの心理的距離をちぢめ、かかわりを深める。（共感的理解）
- ・子どもの視線、表情、態度といった非言語的なものを大切にし、敏感に受けとめ、行動の意味を理解し、応答する。（幼児理解の深まり）
- ・子どもの行動の流れをできるだけ尊重し、たとえそれが逸脱行動のように思えても、その行動の中にその子の興味関心のあらわれや自発的な行動の芽生えを期待して見守る。（目的行動の尊重）

### (2) 障害への理解

- ・発達の理解を深め、発達のプロセスをいかにふみ固めるかという視点で子どもを見ていき、その時その時の課題を明確にしていく。（発達段階と課題の明確化）
- ・障害児の発達や進歩は非常にゆっくりとしたものであり、障害児指導は短時間でできるものではない、という認識をもって接していく。（ニーズに添った対応）

### (3) 一般の幼児へ

- ・障害児は、人間として、また幼児として、一般の幼児と共通の部分がほとんどであり、障害は個人差として現れるものの一つであると見ることが出来る。同じ幼児として、仲間意識をもってかかわっていけるようにする。（対等感に立つかかわり）
- ・一般の幼児が障害児を過度に世話し、その結果障害児が他の幼児に一方的に依存する関係にならないように配慮する。（共にくらす基本姿勢）

### (4) 保護者へ

- ・幼稚園でのさまざまな活動の中から、障害児の微妙な変化を肯定的な見方でとらえ、進歩した点がんばっている姿、よい動きなどをできるだけたくさん見つけて、それを保護者に具体的に伝えながら、保護者を励ますようにする。（緻密な行動観察）
- ・保護者の悲しみやつらさを全面的に受容し、その気持ちや考えを認め、その立場に立って一緒に考えていくようにする。（保護者との連携）
- ・障害をありのまま認め、積極的な態度で養育するよう母親を励ますようにする。（同上）

### (5) 一般の保護者へ

- ・一般の保護者の理解と協力を得るために「障害をもつこの幼児は教師自身にとって大切な存在であり、一般の幼児にとっても人間的な相互理解や思いやりの心を育てるよい機会を与えてくれる

というはっきりとした保育観をもち、その考えを日々の生活の中で教師と幼児たちの姿として実現させていくようにしていく。(障害に対する啓発活動)

## 2. 園の協力体制について

- ・障害児は園全体で受け入れ、園のすべての保育者及び職員の共通理解と、一致協力した取り組みが不可欠となると思われる。

## 3. その他

- ・関係機関との連携、地域との連携などにより、障害児の全面発達を援助し、障害児の生活の場を広げることなどが望まれる。

## おわりに

統合保育のあり方を考え、障害児を行動観察することを通して、子どもの外面的なことにとらわれず、その背景にあると思われる心理的側面をとらえ、子ども理解を深めていくことの大切さを感じた。これから、目の前の子どもを見つめながら、子ども理解を深め、あたりまえに思っていることをもう一度問い直ししながら、自分自身の保育していく力を高め、望ましい保育のあり方を探っていきたいと思う。そして、障害への理解もさらに深め、障害児(者)にさりげなく、ごく自然にかかわり、手をさしのべられる自分になりたいと思う。

最後になりましたが、このような貴重な研修の機会を与えてくださったことに深く感謝すると共に、協力して頂いた三園の統合園の先生方、そして所属園の御幸小学校付属幼稚園の先生方に、心よりお礼を申し上げます。

### ○協力していただいた幼稚園

川崎市立向小学校付属幼稚園、川崎市立梶ヶ谷小学校付属幼稚園、川崎市立生田小学校付属幼稚園

### ○引用文献

- 1).<sup>6)</sup>.<sup>7)</sup>.<sup>8)</sup>. 大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗「障害児保育の基礎」  
フレーベル館 1985年 5 P 174 P 28 P
- 2) 宮本茂雄・鈴木克明「障害児の発達と教育」学苑社 1983年 179 P
- 3) 清水貞夫・小松秀茂「統合保育 その理論と実際」学苑社 1987年 106 P
- 4).<sup>5)</sup> 田辺敦子「統合保育入門」相川書房 1980年 5 P 118 P

### ○指導助言者

川崎市総合教育センター第四研究室長

斎藤祝男

川崎市総合教育センター指導主事

片山世紀雄